

真宗大谷派寺院におけるお斎の現状と考察

金 胎 芳 子

はじめに一本稿の課題の社会的背景と目的

日本社会は「人口減少時代」に入ったと言われ、その「人口減少」のさらなる進行や、「人生 100 年時代」と言われる長寿化の中で、新たな社会の姿として Society5.0¹ の実現が提唱されるなど、さらに大きな社会の変化が訪れようとしている²。

そうした中で、宗教の世界も決して安泰な未来があるとは決して言えない。筆者が身を置く寺院を取り巻く大きな社会変化として、たとえば次の三点が指摘できる。

一つには、やはり「人口減少」である。20 世紀後半の社会減少（転出・転入）から 21 世紀は少子高齢による本格的な自然減少（出生・死亡）がある。その中で全国の小中学校の統廃合も進むとされているが、それ以上に当然、寺院・神社・教会などの宗教施設の廃絶・減少も加速度を増している。寺院においてはいわゆる檀家の減少が、さまざまな考え方があるにせよ、喫緊の課題といえよう。

二つには、「長寿化」である。そして、その「長寿化」にともない「生き方」自体を変えるという提言があり、多世代多様な文化社会への選択とされる³。

三つには、「高齢社会と家族構成の核家族化の加速化」である。国民生活

基礎調査によれば、三世代居住の世帯は1986年以降減少し続け、それに対して核家族世帯と単独世帯の数はほぼ一貫して増加しているという⁴。このことは家に伝わっていた仏事の継承を明らかに危うくし、お参りする心が自然と希薄になっていくこととつながっていると思われる。

現代日本の宗教においては一概に、若者より高齢者が信仰に篤いとされ、彼らが教団を支える構成となっているが、その一方で高齢者の「宗教離れ」が指摘されてもいる⁵。高齢者が信仰を持つ割合はこの40年の間、減少し続けている⁶。このような状況は寺院護持・運営に厳しい現実となり、さまざまな課題が生じているように思われる。

そうした中で、現代の真宗寺院では、「年忌法要」、「報恩講」などの「仏事」は重要とされ営まれ続けている。とくに親鸞聖人（1173 - 1262）没後、長きにわたり継承されてきた「報恩講」は、親鸞聖人をしのびつつ、浄土真宗の教えに帰依する人の集いの場であり、歴史的に見たその相（すがた）は、現代へつながっているのである。

そこで、本稿では、真宗寺院における「報恩講」、とりわけその「お斎」に着目する。「お斎」とは、「仏教において檀家や信者が寺僧に供養する食事、または法要の時などに檀家で僧侶・参会者に出す食事の名称として、民俗学的にも注目され、現代社会においても伝存している表現・認識」で、「本願寺においても行なわれ、それが教団の儀式と組織という点からも重要な行事とされた」といわれる⁷。実際に各寺院において古来、大切に行なわれてきたのが「報恩講」の「お斎」であろう。よって、各寺院における行事の執行現状と「お斎」の実施状況をアンケート調査から確認することとし、そこで浮かび上がった実態を把握し、課題となっていることは何なのか、それとともに、さらなる歩みの展開について、考察することを目的としたい。

そもそも、「食」は、根本的に「命（いのち）」と直結する。筆者はもともと栄養学を専門に学ぶ者であり、その視点からも、宗教（教学）では「食」

をどのように捉えているのかという点についてアプローチし、「お斎」の歴史やこれまでのあり方から、考察してみたい。

第1章 「報恩講」の歴史から見る「お斎」について

佐々木孝正氏の研究によれば、真宗寺院の年中行事は、真宗における理念と信仰の儀礼的实践の一形態を示すものとして注目されており、さらに、仏教は民族的伝統と宗教との多様な交渉のなかでその信仰を社会化し、教団を確立し維持してきたという⁸。

これらの行事は、「専念正業ノ家ニハ一切ノ法事唯念仏タルヘシ」「アラユル法事ハ皆仏恩ノ勤也」⁹と述べられるように、如来及び代々の師主知識に対する報恩謝徳の行として営むものであるとされている。佐々木氏は、その宗教的立場をもっとも具現したものが「報恩講」行事であり、その「報恩講」行事は、一般社会の伝統的な風俗習慣と共通性を示すところがあり、儀礼の基盤には、民俗宗教と深くかかわり信仰の集団性・庶民性・民俗性を如実に示すものがあるという。そして、諸寺院の庶民的な法会における「お斎」といった共同飲食が取りこまれ、歴史的に展開したというのである¹⁰。

第1節 蓮如上人の時代に確立した「お斎」の相（すがた）

それでは、「お斎」の相（すがた）について、その歴史から確かめていきたい。

「お斎」は本願寺八世蓮如上人の頃から確立していたものとみられ、山科本願寺における「報恩講」に関して、

斎の願人のつとめは、逮夜より前に非時過て候。願人の勤果候へハ、やかて逮夜の鐘なり候。非時の願人のつとめは、逮夜過て讃嘆の前にあり、讃

嘯は五時までであり、近年は宵の法会の前夜に齋非時の願人の勤あり

と述べる史料がある¹¹。「齋・非時」は蓮如上人の時代から勤行と同様に重視し、聞法によって真宗の信仰を確立するよい機会とされていたと佐々木氏はいう¹²。蓮如上人没後も、「報恩講」のみならず、たとえば、「毎月二十五日法然、五菜二汁、二十八日親鸞、六菜二汁」というように、「お齋」の実施が指示されている¹³。

本願寺九世実如上人の時代に至って、さらに蓮如上人祥月の三月二十五日、年始、毎月五日も「お齋」が行われ、そしてその献立・品数とも次第に華美になっていったことが知られている¹⁴。

本願寺十世証如上人の時代は、佐々木氏の研究によれば、共同飲食としての「齋・非時」がさらに年中行事や臨時の行事として頻繁に行われ、儀式としての位置も明確になった時期とされる¹⁵。『証如上人日記（天文日記）』や『私心記』では、法会の荘厳や装束、勤行次第の記述にくらべ「齋・非時」における汁・菜・菓子の品数、および「齋・非時」の頭人（とうにん）や相伴者（しょうばんしゃ）の名、員数などきわめて詳細な記載があり、共同飲食である「齋・非時」が重要な行事であると理解されていたという。本願寺歴代の年忌法会の「齋」と「非時」、門末による志としての臨時の「齋」も盛んに行われ、天文十（一五四一）年を例にとれば、年間の「齋」の総日数は、七十一日にも及んでいると記されている¹⁶。この戦国期の本願寺では、上山した坊主衆・門徒衆が各種法要における「齋・非時」に関して「頭人（とうにん）」として調達するのが日常風景であったとされている¹⁷。

しかしながら、中世では中心的位置を占めていた「齋・非時」が、近世以降になると伝統を継承しつつも、形式化していったと考えられている。奉仕が次第に積極性を欠き、勤行の附帯儀礼と化し、本来の意義を失って衰退してきたこと、著名な年中行事が次々と廃止された様相がうかがえる¹⁸。

第2節 現代における「お斎」の相（すがた）

「斎・非時」の文化は、本山の本願寺から御坊、末寺・門徒へと波及して、「共食」することによって、お互いの結びつきを強め、如来や師主知識の恩徳に対する報恩の念を深い感動をもって体験しようとしてきたものと思われる。年中行事として毎年これを繰り返し実践することは、個人が何度もその感動を再現し、法義相続の念を新たにすることであり、また、門徒が世代を超えて追体験することによって、真宗の理念が伝持され永続していくことに、その意義が存するのである。

現代の真宗寺院はさまざまな仏事を執行しているが、「報恩講」は特別な思いで迎えており、一年を振り返り、足元を確かめる機会と考えられている。そういう意味で「お斎」の場は、寺院側と門徒側とコミュニケーションの場となっており、その準備から当日の調理、提供まで、とくに女性門徒の多大な尽力が見逃せない。なお、「お斎」の実施は「報恩講」にとどまらず、真宗寺院の大切な行事である。そこで、「お斎」の現状とそれに関する特に寺院住職の考えについて、アンケート調査を行い、検討することにした。

第2章 「お斎」の現状について—アンケート調査から—

本章では、「報恩講」その他、真宗寺院の「仏事」における「お斎」に着目する。各寺院における行事の執行状況と「お斎」の実施状況・提供方法をアンケート調査から確認する。そこで浮かび上がった実態を把握し、課題となっていることは何なのか、これからの歩みの展開について考察する。

第1節 調査の実施方法

○対象：真宗大谷派寺院を対象とし、新潟地区は筆者の地元である新潟県上越市・高田教区に所属する寺院を、名古屋・他地区は同朋大学別科の同級

生、指導教員の寺院を対象とした。

○方法：「お斎」行事の実施状況と提供状況について「アンケート調査」を実施し、回答を依頼した。「アンケート調査」の配布については、新潟地区は郵送による配布、返信用封筒による回収で実施し、名古屋・他地区は直接配布と返信用封筒による回収とした。

新潟地区の配布先は、新潟県上越市・高田教区内東部地区（第11組27カ寺、第12組19カ寺、第13組34カ寺）と、筆者が研修会などのご協力いただいている第4組13カ寺、第8組34カ寺と第7組の一部8カ寺に調査の協力依頼と調査用紙、返信用封筒を同封し郵送した。新潟地区の配布合計数は135カ寺である。

名古屋・他地区の配布先は、別科の指導教員の11カ寺、別科生の18カ寺、学部生他3カ寺とし、回答を依頼した。名古屋・他地区の配布合計数は32カ寺となった。

○調査期間：2020年11月10日～12月10日の1か月間

○回収数と有効回答数：【表】のとおり、新潟地区の回収数79カ寺（回収率59%）、無効回答3カ寺（解散2カ寺、無回答1カ寺）、有効回答数76カ寺（有効回答率56%）であった。名古屋・他地区の回収数32カ寺（回収率100%）、回答不備4カ寺で、有効回答数28カ寺（有効回答率88%）であった。よって、新潟地区76カ寺、名古屋・他地区28カ寺、総数104カ

【表】 アンケート調査数と回収・回答状況 （単位：カ寺）

	配布数	回収数 (回収率%)	無効数	有効回答数 (率%)
新潟地区	135	79(59%)	3	76(56%)
名古屋・他地区	32	32(100%)	4	28(88%)
総数	167	111(60%)	7	104(62%)

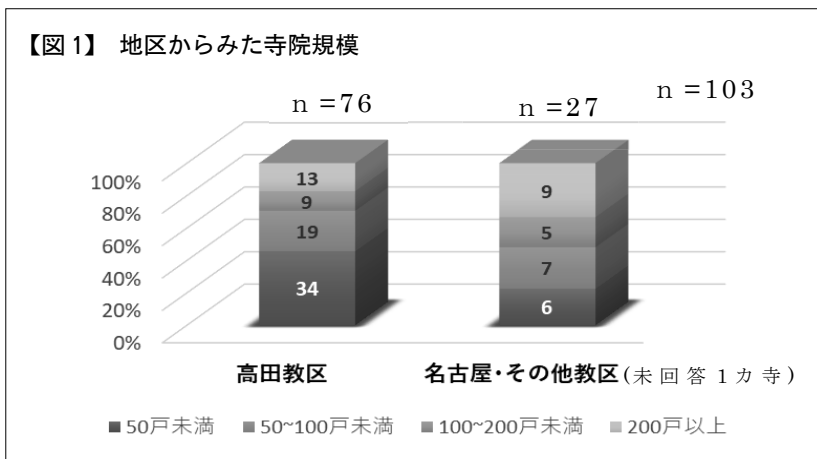
真宗大谷派寺院におけるお斎の現状と考察

寺を対象として分析に用いた。

- 集計**：寺院規模を示す指標の一つである門徒戸数別に結果を評価した。門徒戸数別からみた行事の実施状況や「お斎」の実施状況・提供方法を表した。分析のソフトはSPSSを用いて、門徒戸数別にクロス集計した。また、行事の実施と「お斎」を提供していると回答された場合は、その「よいところ」、「よくしたいところ」を自記式記入で意見を聞いた。
- 同意**：「アンケート調査」の回答とその返送、返信をもって同意とみなしてまとめることとした。
- 調査の情報管理**：寺院名は匿名化し、アンケート結果は調査実施者が適切に情報管理し、本稿においても個別情報が特定されない内容整理と提示をしている。

第2節 アンケート結果とその分析

アンケートの対象とした真宗大谷派寺院の規模を門徒戸数で区分し、【**図1**】に示した。新潟地区・高田教区は76カ寺のうち門徒戸数「50戸数未満」

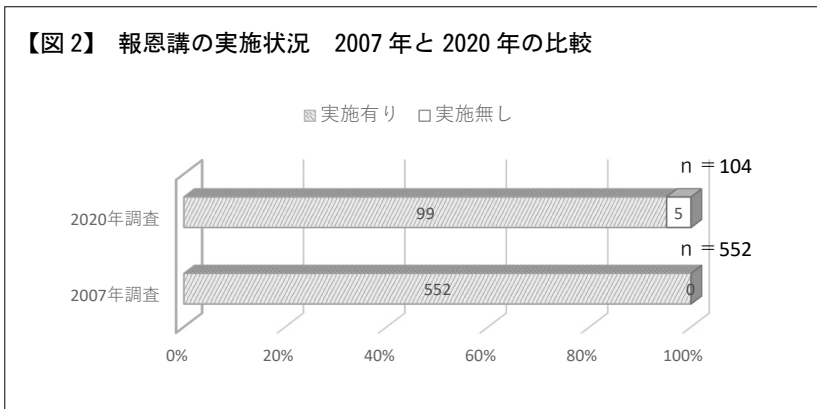


36カ寺、45%であり小規模寺院が半数近く占めていた。名古屋・他地区では27カ寺のうち門徒戸数「200戸数以上」9カ寺、33%であり、比較的大規模寺院が占めていた。新潟地区・高田教区の地域は人口減少や高齢化率が潜在する課題と考えられる。

(1) 「報恩講」とその「お斎」について

まず、「報恩講」とその「お斎」について検討する。【図2】では、「報恩講」の執行現状について、真宗大谷派名古屋教区教化委員会が2007年に調査した結果¹⁹と、今回筆者が実施したアンケート調査（2020年度調査）の結果を並べた。対象地域と寺院数が不揃いなので参考検討であるが、2007年調査（名古屋教区）の結果は全寺院が「実施している」であったものの、2020年調査（筆者）では「実施していない」寺院が5カ寺（5%）あった。その主な理由としては、アンケート調査の自由記述から推察するに、参詣門徒の減少や経済的な節減などが考えられた。

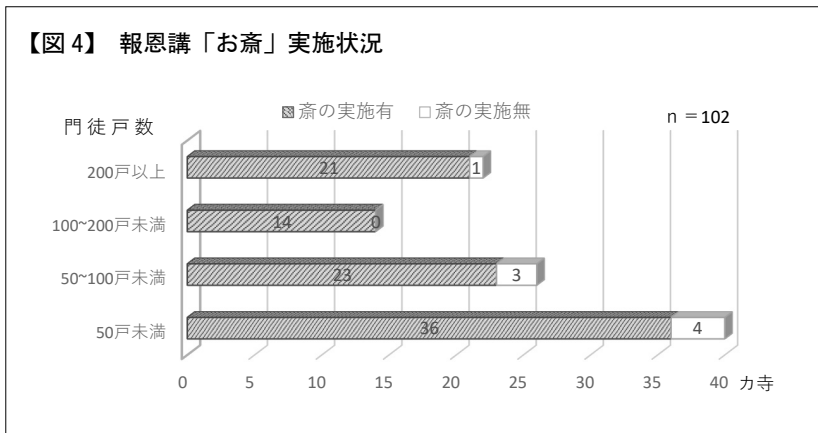
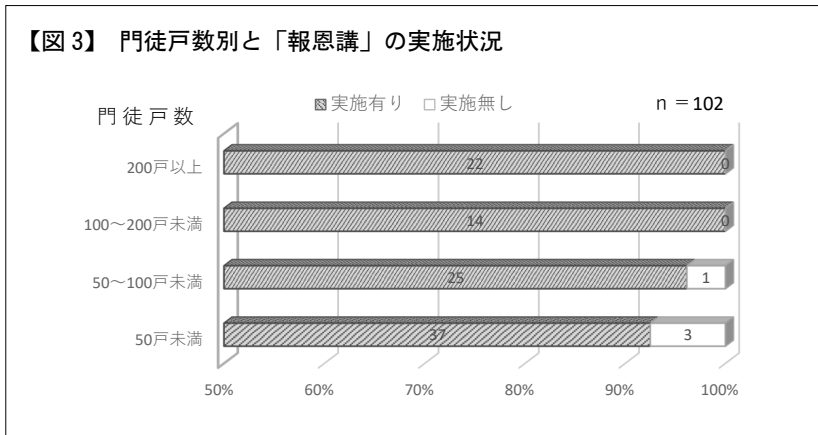
「報恩講」の実施状況を門徒戸数別に【図3】に示した。「実施有り」は全数102カ寺の98カ寺、96%で執行されていた。4カ寺、4%に「実施無し」



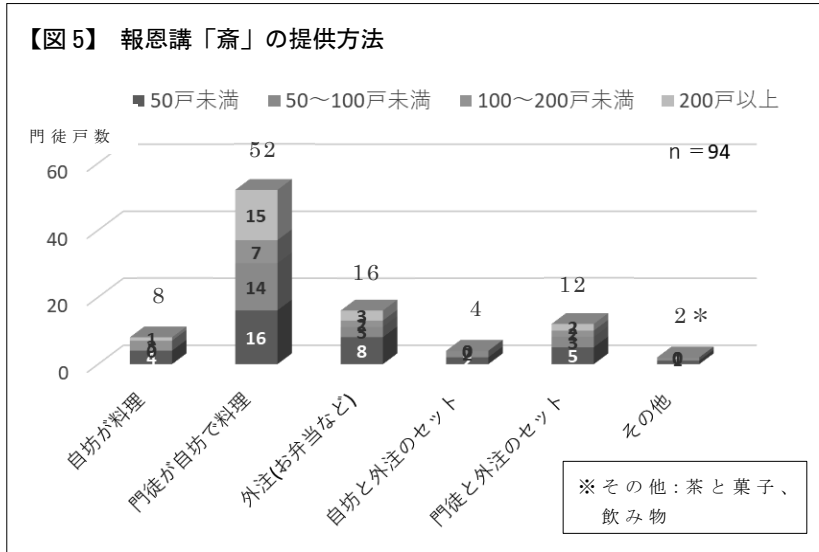
真宗大谷派寺院におけるお斎の現状と考察

であった。特に門徒戸数「50戸数未満」40カ寺中、3カ寺、7.5%に「実施無し」であった。

その「報恩講」時における「お斎」の実施状況を【図4】に示した。「お斎」の「実施有り」とする回答は94カ寺、92%で、「実施無し」は8カ寺、7.8%であり、【図3】の報恩講の「実施有無」の回答と連動していた。「報恩講」は実施するが、「お斎」の提供は無いとした回答4カ寺があった。この



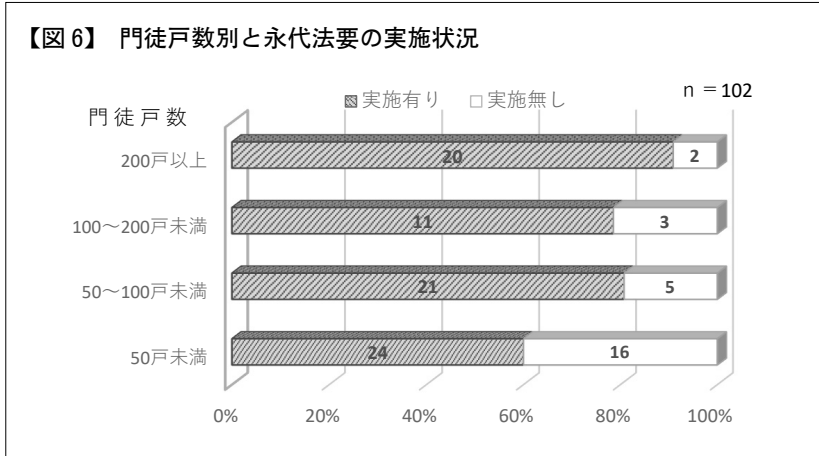
現状は、門徒戸数別「50 戸数未満」、寺院規模からすると小規模寺院に現れていた。さらに、その「お斎」の提供方法については【図 5】に示したとおり、「門徒と寺院の施設で料理する」が最も多い回答で 52 カ寺、55% であった。「お斎」の準備、調理については、その寺院に伝わる昔から取り組まれている流れを継承されているものと推察される。



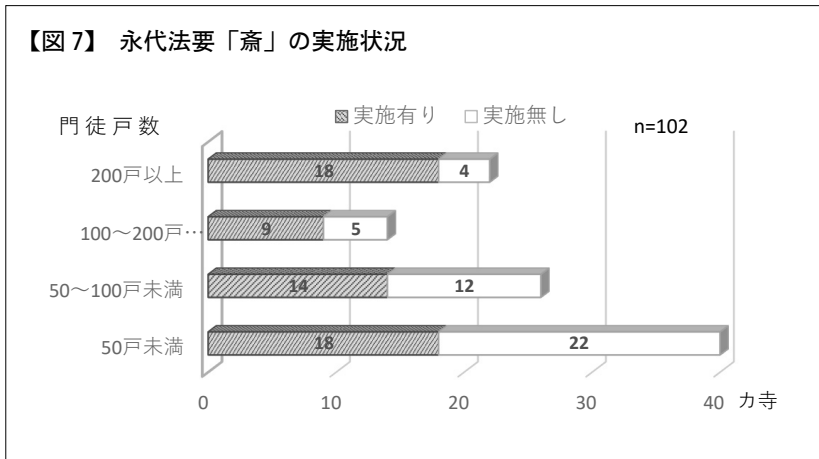
(2) 「永代法要」「修正会」とその「お斎」について

続いて、「永代法要」とその「お斎」についての検討に移る。門徒戸数別の実施状況を【図 6】にまとめた。それをみると、「実施有り」は全数 102 カ寺のうち 76 カ寺、74.5% で執行され、「実施無し」は 26 カ寺、25.5% であった。「お斎」の実施状況を【図 7】に示してみると、「お斎」の「実施有り」と回答は、全数のうち 59 カ寺、57.8% で、「実施無し」は 43 カ寺、42.1% という現状であった。「報恩講」とその「お斎」の実施状況と比較し

【図6】 門徒戸数別と永代法要の実施状況



【図7】 永代法要「斎」の実施状況

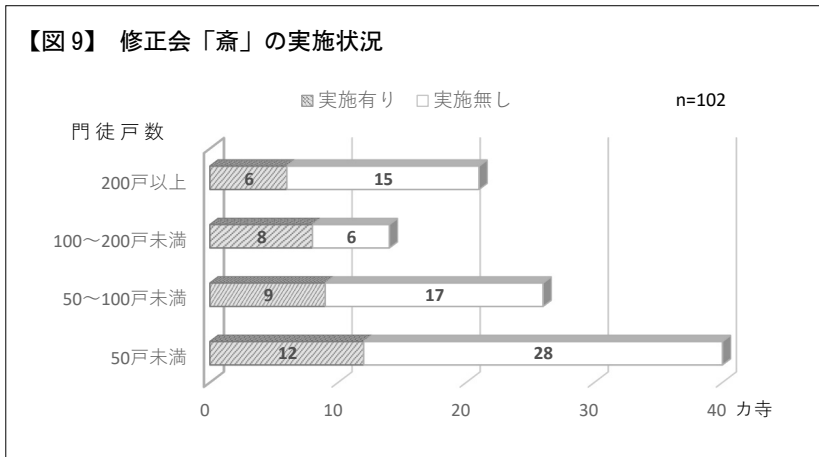
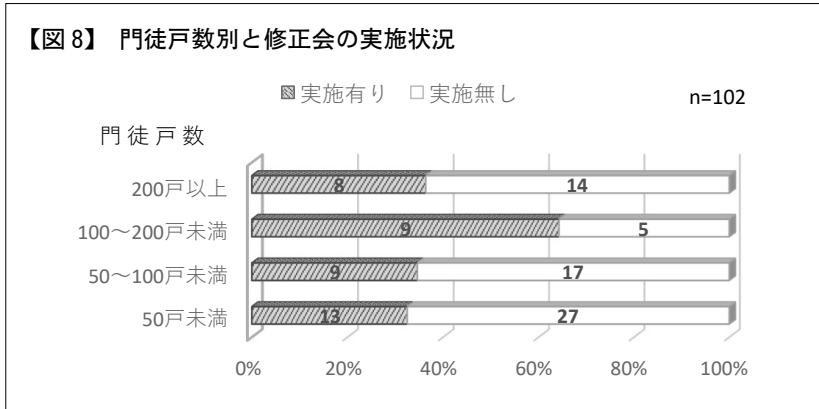


てみると、「永代法要」の執行は減少し、その「お斎」の実施状況はさらに減少していたことがわかる。

同様に「修正会」について、門徒戸数別の実施状況を【図8】にまとめた。「実施あり」が全体で39カ寺の38.2%で、「実施無し」が63カ寺の61.8%であった。さらにこの「修正会」の「お斎」の実施状況を確認してみ

ると【図9】のとおりで、「実施あり」が全体で35カ寺の34.7%、「実施無し」が66カ寺の65.3%であった。

以上のように「永代法要」「修正会」両行事の執行と「お斎」実施状況は、「報恩講」の行事執行、「お斎」実施状況よりも減少していたことがわかった。そして、その減少は、門徒戸数別「50戸数未満」「50～100戸未満」の



※ 2020年「お斎」の現状調査より

小規模寺院に顕著であることが見出された。

「永代法要」「修正会」の「お齋」の提供方法については、【図5】「報恩講「齋」の提供方法」と同様な結果であった（データグラフの提示は省略）。なお、「修正会」については、新潟地区で「年始会」「年始」と呼んで、勤行の執行、一部で「お齋」の提供が行われていた。

ところで、各行事の執行と「お齋」の実施・提供について、「よいところ」はどんなことか、また、「よくしたいところ」を聞いたところ、共通の意見がよく見出された。アンケートのコメントを次に掲げる。

★「よいところ」はどんなことか？

- ・食事をしながら門徒さんと様々な会話ができる。
- ・門徒より食材の提供してもらい一緒に作ることで仲間意識ができる。
- ・互いにコミュニケーション（交流）がとれる場
- ・町内の一同が介して交流できる。
- ・一緒にお齋をいただきことでつながり（連帯感）を感じる。
- ・お寺でしか味わえない雰囲気や料理等がある。
- ・ゆっくり聞法することができる。
- ・お寺に参勤する機会も多くなって良い。
- ・門徒さんから手造り野菜をいただき調理しているので地産地消になる。
- ・お齋に参加された門徒さんから喜ばれている。
- ・向かい合いお寺の手造りお齋は楽しみにしている方も多い
- ・その年によって味付けが異なることも話題の一つ
- ・法要に参加いただき、お寺の意義、聖人の教えの意義、お齋をいただく意義、寺に身を運ぶ意義など同朋に共有すること
- ・お齋をとおして門徒同士の関係も深まり、事業の活性化にも繋がっている。

金 胎 芳 子

- 対話が進み、親睦が深まり、語らいの場になる。
- お齋の提供で参詣門徒が増える。
- 普段あまり食べなくなった精進料理も楽しみと思う。
- 外注と門徒の方々の持ち寄り料理（山菜、ずいき）、寺院で“のっぺ”²⁰を作りいただきます。
- 同じ物を食し、日頃の生活状況を話あえる。

★「よくしたいところ」はどんなことか？

- 現状でよい。
- 修正会はお手伝いの人材を確保することが困難なっており、今後はふるまいを縮小していきたい。
- お齋は継続したいが、簡素化を考えている。
- もっと多数の方からお齋についてもらいたい。
- お寺に参いる機会をもっと増やしたい。
- コロナ問題もあり、衛生面の課題が大きくなった。対策を講じる必要がある。
- 他寺院のことを知り、自坊の対策にしたい。
- 参詣門徒の低年齢化（をはかりたい）。
- 仏事（法要）の推進。
- 年々、集まる人が減少しているので色々な工夫が必要と思う。
- 簡素化の検討が必要か？
- 門徒さんの協力を得られるようにしたい。
- 不特定者に食事を提供することに難しさを感じます（行政の許可を得ていないので）。

★「自由記述の意見」

- お正月はお斎の席を設けない方がよい。年始挨拶とお茶の対応だけにする。
- 寺院離れもこれから切実な問題となっていくと思う。
- 小さな寺院は二足のわらじでやっているが、今後、どうしていけば良いのか悩んでいます。
- 近年、お斎のお手伝いさんが減っている。
- お斎は大事な文化と思う。
- 過疎化が進みお寺をどう護持相続していけるか。
- 今はお参りの方が減少し、寺院支出が上回り厳しい運営である。御講やお斎を楽しみにしている方も多いため今後も継続していくつもりである。
- 地域の寺として永代のお付き合いの中、よい関係を築き続けていきたい。今後の寺院運営・経営の不安や経済的な心配あるが、最後は人と人の繋がりが最重要と考える。
- 門徒離れ、寺院の行事への不参加をどのように防げるのか。
- お斎の提供には女性門徒さんの協力で行っているが、お勤めをしているので時間的に協力が得られない。また、高齢の方は体力的に協力が得られないという現実がある。不安である。
- お斎は楽しみで魅力的なものです。お斎のお陰でお参りがあると言っても過言ではないと思います。
- 限界集落の中で地域に引き継がれて来た仏事を今後どのような形で実施して行くか、難しいところです。

以上のような意見から、地域で継承している末寺において切実な課題がよく見出された。「仏事」の執行も厳しい現状に「お斎」を大事な文化として

捉えつつも簡素化、縮小の検討もされていることがわかった。

第3章 「食」に伝わる教学的知見

第1節 調査から「お斎」の相（すがた）を考察する

本調査は、真宗大谷派寺院における代表的な行事で、親しまれている「報恩講」の実施状況とその「お斎」の実施状況・提供方法について、現状、どう対応しているのか、その実勢を明らかにすることにあつた。

そこから見えてきた課題は、地域社会を基盤としている寺院運営であり、寺院活動の参加者が高齢者限定となっている課題を抱えていた。このことは、「仏事」の執行にさまざまな影響を与えていることが明らかとなった。特に、新潟地区・高田教区の地域は人口減少や高齢化率30.1%（全国平均26.6%）と進行し、中山間地域では、支え合い体制の脆弱化が深刻化していることが報告されている²¹。

今回、筆者が調査対象とした寺院も、その中山間地域に所属しているため、今後、さらなる高齢化の下で高齢化が進み、集落では空き家の増加も切実な課題となってくるに違いない。

そして、「人口減少」は、次ぐ将来の危惧が「門徒の減少」と報告されている²²。新潟地区は、前述と同様な課題を抱えることになる。さらに、住職の意見からも「門徒の寺院護持意識の低下」に「仏事」執行の課題も問われていたが、真宗寺院の課題が社会の変化（人口減少、高齢化、過疎化など）の根本課題と重なり、住職や寺族の危機感となっていると考えられる。筆者もそこに強く問題意識を持っている。

「お斎」について、本調査から、その実施状況と提供方法の現状が見出されてきたが、続いて、筆者が注目する三点について、考察する。

一つには、「お斎」の文化についてみると、「食」を共にいただくこと、共

真宗大谷派寺院におけるお斎の現状と考察

同飲食としての儀式に位置づけられてきた歴史的意義も、現代の真宗寺院においても確かに継承していることをうかがうことができる。「お斎」の場は、人と人を繋ぐ力となっていること、日常の生活情況の対話が進み、親睦も深まり、語らいの場となっている。「お斎」を介して、お寺が居場所となっているのであり、まさに、住職と門徒の仏法讃嘆する姿が「お斎」の相（すがた）にうかがえる。

「お斎」の相（すがた）には、人と人が食を共にすること、つまり「共食」がある。食文化研究者である石毛直道氏は「人が人たる根本の特徴の一つが共食である」と述べている²³。そして、食べるとは、「いのち」と繋がること、共に食べるとは、すべての「いのち」をはぐくむこと、「食」は私たちが生きる根底にあることをあらためて伝えたいことである。

二つには、「お斎」の相（すがた）がもつ食事としての価値についてである。持ち寄る食材は、門徒自ら農作業して手造りした米や野菜、地元で採取した山菜である。この食材を用いて調理し、参詣門徒皆にいただく、これは地産地消そのものである。また、お料理を分け合う行為が共同生活をおくる人間の特徴であって、信頼関係を深める手段となる。提供される料理は、地元で伝承する郷土料理や精進料理であり、その寺でしか味わえない料理であることに「食」としての大きな価値が見いだせる。

さらに、「お斎」は「和食の基本」が整っていて、地域の食文化を物語るものである。2013年12月には、ユネスコ無形文化遺産に「和食」が登録されている。南北に長く、四季が明確な日本には多様で豊かな自然があり、そこで生まれた食文化もまた、これに寄り添うように育まれてきた。このような、「自然を尊ぶ」という日本人の気質に基づいた「食」に関する「習わし」が、「和食；日本人の伝統的な食文化」と題して、ユネスコ無形文化遺産に登録された²⁴。「お斎」に込められた相（すがた）が、その「和食」そのものと合致していると考えられる。

三つ目には、栄養学的視点からすれば、健康で長寿の願いに推奨する食事ということである。そして、健康づくりや生活習慣病の改善を含んだ調整食、あるいは予防食にも寄与するものである。

昔より郷土料理は、その地域の日常食事であり、食素材を焼き物した料理は、まさに素材の持つ栄養素が体内に取り込まれる。「会話がはずんでいること」が主観的健康感の良好さと関連していたという研究報告がある²⁵。「お斎」は、共同飲食の場であり、そこに会話がはずんでいることが健康感の一端を担う場として重要性を持っているのである。

ここまで調査成果について述べてきたが、本調査の限界も確認しておきたい。今回は、新潟地区（中山間地域の教区）と名古屋地区（都市教区）を対象にアンケート調査を実施したが、得られたサンプル数は、全数 104 カ寺（新潟地域 76 カ寺、名古屋地域 28 カ寺）とサンプルサイズとして小さい。今回の結果がそのまま、その地域の宗教的特性をもつ代表値を現すものではない。

第 2 節 「食」に伝わる御聖教のことは

さて、真宗の教えは、「食」をどのように捉えているのかという点を考察したい。そこで、真宗の「助業」という問題について、念仏以外の「行」をどのように位置づけていたのかという点について、御聖教のことはをたずねてみたい。

親鸞聖人の著書『顕浄土真実教行証文類』（以下『教行信証』）には、善導大師の教えを多く引用している。まず、その『教行信証』「化身土巻」に

一四九

「行」は、正行と雑行があると説いている。

行に二種あり。一つには正行、二つには雑行なり。正行というのは、専ら往生経の行に依って行ずるはこれを正行という。（『真宗聖典』335 頁）

さらに、正行を五つに分けている。

一心に専らこの『観経』・『弥陀経』・『無量寿経』等を読誦する。一心にかの国の二報莊嚴を専注し、思想し、観察し、憶念する。もし礼せば、すなわち一心に専らかの仏を礼する。もし口に称せば、すなわち一心に専らかの仏を称せよ。もし讃嘆供養せば、すなわち一心に専ら讃嘆供養する。これを名づけて「正」とす、と。 (『真宗聖典』335頁)

この引用文によれば、正行とは、①読誦、②観察、③礼（礼拝）、④称（称名念仏）、⑤讃嘆供養がある。さらに、それを正定業（④）と助業（①②③⑤）とに分けている。善導大師と法然上人、親鸞聖人の三人は、④称（称名念仏）が正定業であることについては、意見に違いはなかった。しかし、「助業」に関しては、それぞれ捉え方に違いをみる²⁶。本稿における「食」ということを考えた時、法然上人の次のことばが印象に残った。

現世をすぐべき様は、念仏の申されん様にすぐべし。念仏のさまたげになりぬべくは、なによりともよろづをいといすてて、これをとどむべし。いわく、ひじりで申すされずば、めをもうけて申すべし。妻をもうけて申すされずば、ひじりにて申すべし。住所にて申されずば、流行して申すべし。流行して申されずば、家にいて申すべし。自力の衣食にて申されずば、他人にたすけられて申すべし。他人にたすけられて申されずば、自力の衣食にて申すべし。一人して申されずば、同朋とともに申すべし。共行して申されずば、一人籠居して申すべし。衣食住の三は、念仏の助業也。これすなわち自身安穩にして念仏往生をとげんがためには、何事もみな念仏の助業也。

(『和語燈録』卷五・二四「諸人伝説の詩」²⁷)

念仏のために必要ならば、妻帯も認める。また、衣・食・住を「助業」のうちにおさめている。つまり、法然上人は念仏を称える環境を整えることが大切と思えば、「助業」もみな念仏の「助業」であると説いている。

一方、親鸞聖人は「助業」について、積極的には触れず、また言及する場合でも、助業をなす者を自力の人として否定的に捉えていることがわかる。

また、助業をこのむもの、これすなわち自力をはげむひとなり。自力というは、わがみをたのみ、わがころをたのむ、わがちからをはげみ、わがさまざまの善根をたのむひとなり。

(『一念多念文意』『真宗聖典』541頁)

【現代語訳】²⁸

また、助業を好むものは、これこそ自力に励む人である。自力というのは、わが身をたのみとし、わが心をたのみとする、わが力をたのみとし、て行に励み、自らがつくる様々な善根をたのみとする人のことである。

親鸞聖人の場合、「助業」を否定的にとらえていることに、衆生から仏へ歩む上で衆生の業を論じてはいかないという姿勢がうかがえる。称名を助けるための「助業」が、人間の「やりがい」を持った時、逆転し、助業(①②③⑤)が主目的に転換してしまう。そのような助業がもたらす人間の危うさを親鸞聖人は見つめていたのではないだろうか。衣・食・住の三つをも念仏を中心とした生活を整える「助業」としている法然上人は、より実践的に念仏を称えたと考えている。一方、衆生から仏の「行」の関係性を人間の持つ執着心に着目した親鸞聖人の人間観ともいうべき鋭い洞察に親鸞聖人自身の生涯にも深く関係しているとの指摘がある²⁹。

以上のように、御聖教のことはみえてきたが、真宗寺院で行事の執行とは

真宗大谷派寺院におけるお斎の現状と考察

どのような意味をもつのか、「お斎」のもつ「食」のあり方を本願寺の歴史から伝わっている重みを考えたとき、前述のように社会変化の壁に苦勞の根源はあるものの、「一心に専ら弥陀の名号を念じて」と親鸞聖人のことばから、ひたすら念仏申すことにゆるぎない継続が、門徒とのつながりを示し、「お斎」の場でのさまざまな感動は、勤行とともにお互いの結びつきに強めていくことに、その重要性があることを確かめることができる。

年中行事として「法要」と「お斎」を丁寧に毎年繰り返すことが、仏法讃嘆を基とする感動の再現に繋がることと思う。それは、御同朋・御同行とともに仏に教化されていく姿となっていくものと考えてみる。

おわりに

最後に、「お斎」は、現在では真宗寺院の行事の際にいただく代表的な食事を言う。本来の「斎」とは僧家の食事（午前食）のことである³⁰。慎重深く、行い正しい僧侶に提供する食事とされている。このように末寺に伝承している「お斎」をとおして、「いのち」とは何か、それを「いただくいのち」とは何か、それらを問いなおす場、地域の豊かな食文化を若い人たちと、どのように引き継いでいくのか、これまで実践してきた「真宗の教え」を信じて帰依する場として根付いていくことを、もう一度、住職はじめ寺族の皆様とともに考えていきたい。

これからの展望を思うことに、次世代を担う若い人への伝承が欠かせない。それには、子どもの誕生から家族そろって「お寺参り」する。そして、学校の入学式、卒業式、成人式というその人の人生にお寺がある。つまり、人生の節目である冠婚葬祭には、寺院に来て、住職や地域の人と顔を合わせて「南無阿弥陀仏」に合掌するという儀式を丁寧に掘り起すことも重要な課題と考える。

金 胎 芳 子

真宗寺院を取り巻く環境は、望む望まざるに関わらず課題山積の現状である。「変化する寺院」の運営・活動を丁寧に思考し、それぞれができることを実践していくことが重要であると考えます。

〔付記〕本稿は2020年度同朋大学別科で取り組んだ修了レポートの内容を整え直したものです。執筆にあたっては、安藤弥教授および蒲地勢至特任教授より、「お斎」の歴史に関する貴重な情報や知識の提供をいただきました。市野智行専任講師からも教学に関するご指導をいただきました。感謝の意を表します。また、本調査に快くご協力いただきました各寺院の皆様、別科の教員、同級生の皆様に、心より御礼申し上げます。

註

- 1 Society5.0とは、AIやロボットの力を借りて、我々人間がより快適に活力に満ちた生活を送ることができる社会のことを言う。
- 2 文部科学省「人口減少時代の新しい地域づくりに向けた社会教育の振興方策について（答申）（中教審第212号）」（中央教育審議会、平成30（2018）年12月21日公開・文部科学省HP）
- 3 川又俊則「伝統宗教集団のライフ・シフト—社会減から自然減へ向けた対応—」（『現代宗教2018』p227-p248、2018年）
- 4 四衢深・小林隆史・石井儀光・大澤義明「地方において寺院は見守り拠点となりうるか」（『日本都市計画論文集』第54巻第3号、2019年）
- 5 前掲註（3）川又論文。
- 6 石井研士『データブック現代日本人の宗教（増補改訂版）』（新曜社、2007年）
- 7 安藤弥『戦国期宗教勢力史論』（法蔵館、2019年）
- 8 佐々木孝正『仏教民俗史の研究』（名著出版、1987年）。なお、以下の註（9）（11）（13）（14）（16）（18）の歴史的文献史料は、まず佐々木著書を参考にし、確かめ、典拠となる史料集を表記した。
- 9 『叢林業』巻七「法事勤行第五三」（『真宗史料集成』第8巻、同朋舎出版、1991年）
- 10 以上、前掲註（8）佐々木著書。
- 11 『山科御坊事並其時代事』第26条（『大系真宗史料』文書記録編13儀式・故実、法蔵館、2018年）

真宗大谷派寺院におけるお斎の現状と考察

- 12 前掲註(8) 佐々木著書。
- 13 『蓮如上人御遺言』(『真宗史料集成』第2巻、同朋舎出版、1991年改訂版)
- 14 『本願寺作法之次第』第129条(『大系真宗史料』文書記録編13)
- 15 前掲註(7) 佐々木著書。
- 16 『証如上人日記(天文日記)』『私心記』(『大系真宗史料』文書記録編8～10 天文日記Ⅰ・天文日記Ⅱ・私心記、法藏館、2015～17年)
- 17 前掲註(7) 安藤著書。
- 18 『真宗故実伝来鈔』巻下(『大系真宗史料』文書記録編13)
- 19 『報恩講の再生』(真宗大谷派名古屋教務所、2008年)
- 20 「のっぺ」とは、新潟の郷土料理。里芋などの野菜の煮物で、正月や人の集まる時などによく食べる料理である。
- 21 『上越市の現状と課題』(平成30(2018)年5月23日・第1回総合計画審議会・資料No.4)…「新潟県人口移動調査結果報告」に基づき上越市創造行政研究所が作成した報告書(上越市HP)
- 22 窪田和美「真宗寺院における寺院規模と門徒の護持意識—第9回宗勢基本調査の分析を通して—」(『龍谷大學論集』第479号 p142-171、2012年)
- 23 大原千鶴『お斎レシピ みんなでおいしい精進料理』(東本願寺出版、2017年)
- 24 「和食；日本人の伝統的な食文化」がユネスコ無形文化遺産に登録されました(農林水産省HP…アクセス日2021年2月9日) <https://www.maff.go.jp/j/keikaku/syokubunka/ich/>
- 25 坂本達昭・吉村栄一「暮らし向きのゆとりがなくとも主観的健康感が良好な人の家族との食事のあり方」(『日本健康教育会誌』第27巻第1号 p43-51、2019年)
- 26 WEB版『新纂浄土宗大辞典』(アクセス日2021年2月10日) <http://jodoshuzensho.jp/daijiten/index.php>
- 27 『真宗聖教全書』四巻・683-684頁
- 28 『一念多念文意・一念多念分別事(聞法テキスト1)』(東本願寺出版、2020年)
- 29 市野智行「親鸞の助業観について」(『同朋大学佛教文化研究所紀要』第36号、2017年)
- 30 前掲註(7) 安藤著書。